

御挨拶

中村歌右衛門

皆様 本日はお暑い中をご来場下されまして誠に有難うございます。

「葉月会」は今年、第十六回を迎えます。中堅・若手俳優並に邦楽若手の技芸発表の場として昨年は第十五回記念公演を盛会裡に開催させて頂き嬉しい年でございました。

是もひとえに皆様方の温かいご支援のお蔭様と厚く御礼申し上げます。

本年は河竹黙阿弥作品より初演資料を基に新しくころも替えした「新累女千種花嫁」を上演できる運びとなり、ご繁用中にもかかわりませず今回も河竹登志夫先生の監修を得ました事は多くの諸先輩の御指導と併せて出演者一同いかばかり励みになります事か一同に代わりまして厚く御礼を申し上げる次第でございます。

また舞踊は「神田祭」をご覧いただきます。

藤間勘十郎師には引き続き振付をたまわり、重ねて暑中にもかかわりませぬお稽古をつけて下されました事は一同にとりまして身にあまるご鞭撻でございまして、この場ではございますが心より厚く御礼を申し上げます。

このように身にあまるご指導を頂戴して稽古を続けております修行中の者ばかりでございます。一同の稽古熱心にめんじて、どうぞ年に一度の舞台を見てやって下さいますよう重ねてお願い申し上げます。

なお、毎夏の開催にあたり惜しみなくお力添え下さいまするご指導の諸先輩をはじめ、関係者各位、とくに日本芸術文化振興会・国立劇場の皆様には心より御礼申し上げたく、この機会にご挨拶申し上げます。

(伝統歌舞伎保存会会長)

平成九年八月

第十六回 葉月会 国立劇場大劇場

歌舞伎青年俳優 研修発表会

河竹登志夫 監修
河竹黙阿弥 作品より
竹柴正二 脚本

一 新累女千種花嫁

序 幕 千葉家奥殿試合の場

名草權之丞道行の場

藤間勘十郎 振付

淨瑠璃へ夢姿粧色縫 (清元連中)

同 奥庭名草殺の場

下総與左衛門内の場

同 羽生村街道の場

元の與左衛門内の場 (竹本連中)

大詰 木下川堤累解脱の場 (竹本連中)

藤間勘十郎 振付

二 神田祭

清元連中

平成九年八月二十日(水)十一時三十分 開演

四時三十分 開演

主催 蘭伝統歌舞伎保存会

後援 日本芸術文化振興会

中 村 歌 江 安 藤 孝 宏
中 村 紫 若 宇 貫 貴 雄
尾 上 梅 之 垣 近 藤 太
中 村 歌 松 上 條 岳
尾 上 德 松 中 藤 伸 郎
中 村 吉 世 佐 藤 伸 雄
市 川 竜 之 助 佐 藤 健
中 村 吉 六 佐 藤 昇 次
市 川 左 十 次 郎 佐 藤 雅 志
中 村 吉 次 佐 藤 雅 志
市 川 左 十 次 郎 佐 藤 健
中 村 吉 次 佐 藤 昇 次
尾 上 寿 鴻 長 噴 連 中
中 村 吉 次 鳴 物 連 中
尾 上 寿 鴻 長 噴 連 中
松 本 錦 一 (第十四期歌舞伎俳優研修会)
澤 村 紀 義
市 川 左 十 次 郎 八 田 武 也
中 村 吉 次 田 端 俊 也
尾 上 寿 鴻 長 噴 連 中
松 本 幸 右 衛 門 中 村 吉 次
清 元 連 中 ○

河竹登志夫 || 監修
河竹黙阿弥 || 作より
竹柴正二 || 脚本

新累女千種花嫁

三幕七場

累伝説・幕末に登場した憑霊物語

三二五年前の寛文十二年（一六七二）下総羽生村に今も法藏寺に伝わる憑霊怪奇が起きた。百姓伊右衛門に殺された妻・累の怨霊が娘の菊に憑依して、夫の凶行を喋り始めたのである。その内容があまりに具体的で残酷なので村人は恐れおののき、近在の弘経寺にいた祐天上人に除霊を懇願した。だが淨上宗は呪術祈祷をしない。しかし村人の救済を本道とする祐天の決断で累を得脱させ称名念佛が讀えられるに至った。

これが累の本伝である。

この累伝説は、やがて芝居・人形・読本に書替えられて伝わってきた。

黙阿弥も「累もの」を市村座に書き下ろしていた。五代目菊五郎の累であった。

物語は、千葉正胤公をめぐる城内の権力争いから始まる。羽生村と城内を巻き込む世界に「累伝説」を生き返らせたのが幕末らしい「新累」になっている。ビル乱立の現代に跋扈する「怪異世界」は広がりつつあるかも知れない。ひと夏の舞台に新しい「累伝説」をごゆっくりとご覧下さい。

千葉家奥殿試合の場

千葉 正胤 紀
局 松葉 梅 之
局 瀬尾 紫 若
腰 元 吳竹 吉
腰 元 桂 宇貴 雄
腰 元 安藤 孝 宏
元 佐藤 雅 志
元 佐藤 昇 俊
腰 元 田 端 次
腰 元 中小姓 権之丞
腰 元 歌 江

千葉家の奥庭は、のどかな景色に彩られながら、大奥さながらの陰謀が渦まいていた。

主流の局（つぼね）松葉が推挙する腰元名草、一方は局瀬尾が推す吳竹の試合が今始まるとしている。

まずは、江戸の香りを伝える上野の桜のひとつ枝が献上されて、正胤のご機嫌うるわしくいよいよ御前試合が始まった。

この成り行きをじっと見つめている一人のお小姓がいた。中小姓の西入権之丞である。

その美貌は幼い頃から評判で、多くの腰元が騒いでいた。

見事勝ち名乗りをうけた名草に、あかしの小袖を手渡したのは権之丞であった。見交わす日の奥に名草はたしかに恋を見た。

名草權之丞道行の場

藤間勘十郎 振付

淨瑠璃へ夢姿穢色縫

名草歌江
權之丞左十次郎

淨瑠璃 清元 荣志太夫

清元 志壽了太夫

三味線 清元 清榮太夫

清元 志磨太夫

作曲 清元 雄一郎

清元 美多郎

花びらも 草の露とぞ 消えにける
今は隠れしのんで逢瀬をつづける二人は、たよりなき
流れのように細い。名草は、正胤公の側室に上がるこ
とが決まったその日に恋に落ちた。

へいそいそつれ添う名草の手をとり 見はてぬ恋
の道芝を 隅なく照らす月影は せめてこころ
に晴れわたる 結ぶえにしか 夢見草
恋は名草を真つ二つに引き裂いていた。このまで許
される筈もなく 道は二つ、身は一つであった。
へーこがれし思いは はてしなく 露おく野辺
の忘れ草とぞ 知られてあわれなり
だが權之丞はたまらず、名草をおいて逃げていった。
名草には、恋しい人の面影だけが残された。

千葉家奥庭名草殺の場

腰元名草	局松葉梅之
腰元吳竹	局瀬尾紫
腰元楓	吉
腰元吳竹	吉
腰元露芝	徳
腰元桂	宇貫貴雄
腰元桂	世松次

名「それでも 口竹さんが」
呉「これ名草 私がいつ言いました」

はじめから仕組まれていた。

瀬「幸いここで出会うたからは 中小姓權之丞との
不義密通の儀を問い合わせるぞ」

これが瀬尾派の狙いであった。

瀬「姿形がみめ麗しく生まれついたが そなたの
身の災い この美しい顔で殿をたらしこみ
その口で權之丞をそそのかしたか」

なぶり殺しにされた上、名草の遺骸が池に沈められた
——一日は勝利を掴んだ松葉派は名草の謀殺と共に壊
滅した。

胸さわぎを感じて駆けつけたが遅かった。

名「瀬尾のお局様 お殿様の上意を承つてまいりし
もの」
瀬「こりや おかしいわいな わらわはそんな話は
聞いてはいぬぞや」

下総與左衛門内の場

金五郎実ハ

西入 権之丞 幸右衛門

用人 十太夫 錦 一

中間 上條岳伸

中間 近藤太郎

中間軍平吉 六

與左衛門娘 累 歌江

名草の亡靈

を百も承知で何とかしてお城勤めが出来るようになると願っていた。だが、金五郎はその話になるといつも逃げるように出掛けてしまう。

金五郎はなぜ浪人を続けるのだろうか——その心の中を与左衛門も累ものぞく事が出来なかつた——。

ある日、千葉家から思いがけない使者が与左衛門の家を訪れた。

累にお城奉公の話が舞い込んだ。累は驚き、喜び、迷い、そして決心した。この時を逃せば、もう夫に出世の道はない。先に千葉家へ上がつていれば、どんな縁で金五郎どのにいい話が起きるかも知れない——それに父さんへの孝行もできる。

使者が持参した千葉家の重宝・秋草の小袖におそるおそる手を通す累に喜びが溢れた。

その小袖こそ、名草拌領の品であった。

与左衛門は下総羽生村の百姓であった。早くから妻を亡くし、娘累をおどこで一つで育ててきた。その累に金五郎という婿ができ、どうやら人並みの所帯になつた。

累は、婿の金五郎が元は武士勤めをした事があるの

下総羽生村街道の場

金五郎実ハ

西入 権之丞 幸右衛門

中間軍平吉 六

中間軍平吉 六

夜鷹お松 安藤孝宏

百姓 與左衛門

吉 次

にそつくりな累に一日惚れ、所帯を持った浪人暮らしが行き詰まり、昔の仲間の軍平を抱き込んでいっぱい飲ませて仕組んだとんでもなくなりだ。

藪だたみから、ぬーっと現れたのは、累の父親の与左衛門であった。

与左「コレ婿どの こなたの様子がおかしいので千葉家からの帰り路 ここに忍んで始終の様子はみな聞いた」

権之「そうか 何もかも聞かれていちやあ仕方がねえ 累を売つたア この俺だ」

街道は人の暮らしを結ぶ。喜びも悲しみも、そして思われぬ秘密の通り道。

使者の一人と見えた中間の軍平が、金五郎と立ち話をしていた内容は恐ろしいものだ。

千葉家の使者をよこし、累をお城へ上げようと企んだのは、夫の金五郎であった。

金五郎こそ、千葉家を遁走した権之丞であった。名草

用意していた。仰向け様に鮮血をふき上げた与左衛門は、どつと倒れた。女房とごぜを殺した同じ鎌だ。なんという因果だろう。おそらくなつて権之丞は鎌をほうり出して逃げていった。

下総與左衛門内の場

與左衛門娘 累 歌

西入 権之丞 幸右衛門 江

百姓 惣八 東志二郎 助

百姓 谷助 竜之助

百姓 仁一 佐藤健次

百姓 作蔵 八田武也

木下川堤累解脱の場

與左衛門娘 累 歌 江

西入 権之丞 幸右衛門 江

百姓 佐藤昇一

百姓 佐藤健次

百姓 佐藤雅志

百姓 佐藤武也

百姓 佐藤岳伸

百姓 佐藤太郎

百姓 佐藤鴻

百姓 佐藤武也

百姓 佐藤岳伸

百姓 佐藤太郎

百姓 佐藤太郎

淨瑠璃 三味線
竹本葵太夫 豊澤淳一郎

作曲 竹本葵太夫

權之丞は、恐ろしくなって家を逃げ出した。追いかがる累に、名草の靈が乗り移り、累かと思えば名草となり、名草かと思えば累となり、魂魄は小袖に現れて權之丞を追つていった。



何も知らない累は、もう父さんが帰る時分と待っていた。
そこへ帰ってきたのは、金五郎であった。

累「父さんがどこへ行ったか お前知らないかい」

金「娘のお前が知らないのに 何で俺が知っているのだ」

「どうぞ近所の知り合いが戸板を運んできたのは 丁度そんな時であった

騒ぎをききつけて出てきた累は、腰を抜かさんばかりに驚いた。それは、与左衛門の死骸ではないか。

累「こりや父さん 父さんいのう」

累には何が起きたのか動転するばかりであった。

泣き崩れている累の顔を、ふと見た金五郎は、ぞっとした。

金「お前の顔が」

累「私の顔がどうぞしましたかエ」

それは見るも無残な火傷で覆われていた。

金「これ累 よく見やれ これがそなたの顔なのじや」

金五郎に押さえつけられて、無理やり見せられたおのが顔。

淨「泣きくずれたる有様は この世のものとは見えざりける

木下川へ追いつめられた權之丞は、ついにすべてを白状した。

もとは千葉家の武士であったこと、あまりによく名草に似ていたこと、金に目が眩んで企んだこと、与左衛門を殺してしまったこと、累には青天に霹靂のことばかりであった。今は観念した權之丞は、流れてきた鎌を見るや、累に刃を添え取らせ、腹かき切つて絶命し、木下川の水底へ沈んでいった。絶望のあまり後追う累を留めたのは、弘経寺の祐天人であった。上人は、永らえて菩提を弔うことこそ累の勤めと説得し念佛を称えるや、怨念こもる小袖は宙に舞い、見れば累の傷痕跡かたなく、称名念佛のみ木下川堤に響き渡るのであった。

藤間勘十郎 振付

神田祭

芸者 梅之丞 若江 次若
幸右衛門 吉次 頭頭 芸者 紫若
幸右衛門 幸吉 右衛門 次若

「神田祭」はその名のとおり 神田明神祭礼を写したものですが、中身はごく難しいので有名であります。

今回は、女方の歌江 梅之丞 紫若の芸者、立役の幸右衛門 吉次が頭に出演し、それぞれがいかなる舞台をみせるか、期待をいだかせる一幕であります。

藤間勘十郎師の稽古は、例年にもましてきびしいものがありましたのも、取り組んだ五人の懸命さのあらわれであり、お祭りものとはいながら格調たかい舞台であります。

淨瑠璃	清元榮志太夫	作詞者	三升屋二三治（二代目清元榮寿太夫の父 でも有名）
三味線	清元志磨太夫	作曲	初代清元斎兵衛（「文売り」の作曲もあ り文政年間に活躍）
上調子	清元美多郎	本名題	メ能色相図（しめろやれいろかけごえ）
	清元邦二郎		

解説
みますやにそうじ
三升屋二三治（二代目清元榮寿太夫の父
でも有名）

初代清元斎兵衛（「文売り」の作曲もあ
り文政年間に活躍）

メ能色相図（しめろやれいろかけごえ）

馬琴の「因果物語」によって書かれたとあるが、こ
れも鈴木正三の「因果物語」ではないかと推量され
る。識者のご教示を待つ次第です。

○：初演は、五代目菊五郎の累・初代左團次の西入権
之丞でした。五代目はこの時は家橋時代で、翌年の明治元年に襲名をしています。五代目と左團次の顔
合わせでどんな舞台を見せたのか思えばワクワクい
たしますが今日では思い描くしかできません。現代
の記録保存の有難さをよくよく噛みしめたいと思
います。

まくあい

資料館

- ：『累もの』の双璧の一つが初代桜田治助の「伊達競阿国劇場」でこれはヒット作品となりその中の「身売りの累」と呼ばれる場面は独立して上演されている。第四回・葉月会でも「薰樹累物語」（めいぱくかさねものがたり）として上演された。
- ：もう一つが鶴屋南北の「阿国御前化粧鏡」で、上方に世界をとった狂言。通称「湯上がりの累」と呼ばれてこれも人気狂言である。
- ：今回の「新累女千種花嫁」は、すでにご紹介の通り河竹黙阿弥の累もので、「嫁入りの累」とでも云おうか。慶応三年七月に市村座に書き下ろされた新作。残念ながら台本が「黙阿弥全集」その他にも掲載されておらず、いろいろの資料から狂言作者竹柴正一が執筆、再創作した。

長唄みす内音楽を稀音家政吉次、道行の清元淨瑠璃を清元栄志太夫・清元美多郎、竹本淨瑠璃を竹本葵太夫、鳴物を望月太左之助と、ベテラン・中堅のお師匠さんにお願いして舞台化を実現できた。もちろん

祐天上人の実像

——祐天上人について少し。

後に顯誉上人と云つて綱吉の時代に大本山芝増上寺三十六代の法主にまで出世したお坊さんで、近世の高僧列伝には必ず列挙されています。

——偉かつたんですね。

たいへんな出世を遂げたお坊さんのですね。それも若かった修行時代に累一族の災いを助けた履歴が上人の功德として喧伝されたお蔭もあるようですよ。

——偉くなる人は若い時分から違うんですね。

下総の飯沼という所の弘経寺にいた時、近くの羽生村に累夫婦が住んでいた。夫の伊右衛門は、妻の累が醜婦で嫉妬心が異常に強いのを憎み近くの絹川で溺れさせて殺すのですが、その怨霊が娘の菊の身体をかりて

——なるほど。
檀通上人はしかし、浄土宗は呪術的な加持祈祷は行わないで行くことはできないと断るのですが村人はおさまらない。これからが祐天上人の偉い所ですが、佛道は救済が本道であるといって住職の許しを乞い、六人の所化を従えて羽生村へ乗り込むのです。

——まるで芝居のようですね。

「死靈解脱物語聞書」という本が「本伝」として伝わっていますが是が宗派の教化本を超えたのは祐天対菊の対決を実に詳細に書き残し、除霊の失敗も、祐天の自信喪失も恐れずに書き上げてある点です。

嫁入りの累

りました。累伝説の息の長さの秘密は、こゝら辺りにあるようですよ。

何度も読経を続けても巧くいかず、最後は淨土宗の深秘といわれる「超世別願の称名」という秘儀まで勤めるのですが効なく、さすがの祐天も断崖絶壁に立ちます。

——こんどの新累は書替狂言ですね。

今迄話した事はいわゆる本伝というものでこの伝承から種々様々な読本や人形淨瑠璃や歌舞伎が生まれてきました。

——それが「資料館」に詳しい。

そうなんですよ。累ものの書替はかなりあります。しかし次々と書替狂言が生まれてくる所以はこの伝説の持つ憑依の怪異と、一方ではめぐる因果の恐ろしさだと思います。

——早く結末を教えて下さいよ。

いやいやこの紙面ではとても語りつくせません。ともかく怨霊退散は成功するのですが、そこに至る迄の菊との対決における祐天上人の求道の姿勢には宗派を超えた感動があり、多くの読者を獲得した理由にな

乗り移り、重い柴を背負った累を水底に沈め、口の中に砂をつめて殺した情景まで詳しく喋ったので驚いたのは羽生村の人達です。

——嫁入りの累もそのひとつ。

うまいですね。「身売りの累」「湯上がりの累」を売りたいのでしょうか?

——わかりますか?

分かりますよ。芝居の人は実際に巧みなネーミングをしますね。桜田治助の累を「身売りの累」、南北の累を「湯上がりの累」とつけました。

——今度は黙阿弥で「嫁入りの累」。

菊や伊右衛門は出てきませんが、西入権之丞との純な恋に破れた怨念が秋草の柄の小袖を通して累に憑依し、何も知らずに金五郎に情をつくす累にさえもとりついで側室に上がる事を阻止しようとする執念はやはり恐ろしい物語です。

——前半の千葉家城内も珍しい?

黙阿弥が芝居にした今度の「新累」は千葉家の中小姓の権之丞で腰元名草と恋におちます。この青春の傷心が尾をひいて浪人金五郎となり、名草に似ている羽生村の累と所帯を持つのですが累は金五郎の過去を知らない。金五郎を出世させたいと願う余りお城奉公を決心するのですが、これが全く裏切られる。その哀れさが実に悲しい結末です。

累と憑霊に苦心

——出演はいつもの顔なじみで。

今年も歌江・幸右衛門の顔合わせが実現しました。

歌江さんは、名草と累の二タ役で張り切っていますが大役の累には、まず減量が肝心と七キロのダイエットに挑戦していました。

——7キロは大変ですよ。

そう思いました。夜おそい食事は先ず諦め、大好きなビールを絶っているのには、よそ見ながら氣の毒のようでした。その代わり効果がみるみる現れ、少し痩せすぎでお医者さんに注意を受けたようです。

——たいへんなもんですね。

こんど抜擢の左十次郎さんは左団次さんのお弟子で、研修生九期卒業の立役。若き日の西入権之丞を勤める

——抜擢はすばらしい。

そうなんです。これからも大いに機会を作ります。

ほかにも、吉次さんの腰元と與左衛門の二タ役も話題です。祐天上人の尾上寿鴻さんが初出演、千葉家対立の局を梅之丞・紫若が固め、腰元や村人などに在校中の研修生が多勢初出演するのも賑やかな話題です。

——権之丞は新しいキャラクターでしょうか?

西入というのは本伝の伊右衛門が悪事を悔いて剃髪し、僧籍に入った時の号なのです。

滝澤馬琴の「新累解脱物語」にも登場して放蕩者の医者が西入玄冬といい、後に寺侍になつて名乗つたのが西入権之丞でした。

平成8年8月20日

写 真 集

高 橋 とじあわせお =綴合於



(左) 船頭弁蔵 || お 傳 || 歌 次 江

お 傳 でんのかなぶみ 傳仮名書 =



吉田清五郎 浪之助 紫若
吉三郎



お 傳 歌 江 浪之助 紫若

横浜から東京へ。まだ鉄道より船便が便利な明治であった。船頭弁蔵（吉次）につい油断したお傳は、船酔いから癪をおこし、ついつい弁蔵に心を許してしまった。弁蔵に魔がさした。大劇場の中央の小舟は、まるで東京湾に浮かんだお傳の舟のように小さかった。争うはずみにお傳も弁蔵も海中へ。後を追つてきた清五郎の舟が遅かつたらお傳の命は海の藻屑と消えていた——ここでお傳は、命にも代えがたい夫浪之助の死を聞かされた。運命は転した。

相宿で知り合った佐藤七蔵の紹介で横浜にゆく。いい治療のためには藁をも掴むとはこのことだった。吉田清五郎（吉三郎）は土地の親分で夫婦を親身で迎えた——この好転が次の災いを生むとはお傳にもわからなかつた。七蔵の親身もお傳ほしさの深謀遠慮とは気がつかなかつた。薬代ほしさに東京へ金策に出掛けた留守に、届いた七蔵からの飲み薬を飲みすぎた浪之助はもがき苦しんだ。驚いた清五郎に抱き抱えられた浪之助の最後。貫禄の清五郎を吉三郎さんが好演した。

夏なのに、どてらを羽織る浪之助（紫若）が、涼しそうな着物地の女房のお傳と対照的である。いかにも病人とわかるこの写真が語るように、序幕のこの夫婦は仲睦まじい日々を送っていた。いたわるお傳にかしづかれている浪之助の視線には、それほど重病人とは見えないしたしかさがある。これがこの難病の特異なところだ。浪之助を好演した紫若さんは、やわらかい立役に新境地を開いた。女方ならではの優しさを生かした。したたかな演技が、収穫を生んだ。

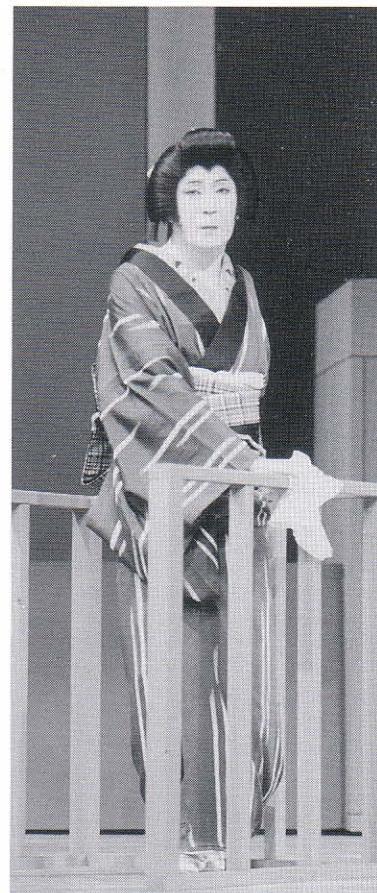
高橋

とじあわせお
=綴合於

|| お傳一態 ||



お傳 歌江
後方 判事補 義
判事補 紀義



お傳 歌江

お傳

でんのかなぶみ
傳仮名書 =



お傳 歌江



お傳 歌江
七藏 幸右衛門

逃げようとせず、観音様をお参りしたい、と出かけた堂々が近頃の犯人とは違う。築地河岸で捕縛されたお傳はやがて法廷へ。この法廷場面が秀逸だった。

都合がわるいと引き延ばした「あ、痛タタタッ」が笑いを呼んだ。歌江という役者の千変万化には驚かされる。「鵜飼」の狼、「敷島」の引込、お梅の縁切り。今度もむずかしい法廷にせず、のらりくらりのお傳を再現した大詰を長くファンは忘れられないだろう。

歌江の芝居は油断がならない——つまらなそうに見えても幕をあけると面白いんだから、と云つて帰った行つたお客様が、今度はこちらが長く忘れられなくなつた。

後の裁判法廷でも事実関係で重要な場面となつた「蔵前宿」は七藏（幸右衛門）の凄味と女ぐせが見事に出た。歌江のお傳も本領を発揮、久しぶりに見せた歌江・幸右衛門の名場面となつた。きかせの清元といい、あやしげな蚊帳、行灯と道具は揃つっていた。

お傳は浪之助を殺したのは七藏だと信じていた。七藏は、邪魔な浪之助があの世へ行つた今、お傳を手に入れる嬉しさで目がくらんでいた——喉をひとつき、見事に息の根をとめて蚊帳を出るお傳。くわえた懐紙。かみそり。鐘の音。「待つてました」の一聲。

長唄

今 杵芳松
藤屋村永
長三伊兵
七郎十二
平郎

附 師

稀音家政吉次

国立劇場

美術碇山喬

北崎富康

三味線

杵杵杵
屋屋屋
巳六三
太郎邦
治雄

竹本作曲

淨瑠璃

舞台監督

音響

作物

杵屋望
月○哲
太左之助

三味線

竹本葵太夫

日本衣裳

具(株)

鳴物

杵屋望
月○太左之助

淨瑠璃

竹本葵太夫

舞台柳下壽

樹

長唄指導

杵屋望
月○太左之助

竹本作曲

淨瑠璃

舞台杉山美

樹

来年の葉月会は八月二十日(木)です。

第十七回特別企画

瀧澤馬琴^{（第十期鳴物研修生）}作「近世説美少年録」より

『美少年於夏聞書』

を上演予定です。

○…本編は瀧澤馬琴の読本の中でも異色作品として著名です。ご期待下さい。

かさね塚供養

|| 歌江・幸右衛門 ||

祐天寺へ参る



II

「新累女千種花嫁」上演に先立つて、中目

黒の祐天寺境内にある『かさね塚』を訪れた二人は、あらためて累一族の靈前で厚く供養を営んだ。

その日七月三十一日午前十一時半は、前日の豪雨も晴れ上がり夏日の空となつたが、住

職勝雄上人の読経が始まるや、にわかに驟雨きたり、一同騒がしくなつたが住職動ぜず読

経を続けて無事終わるや、ふしきに雨足やみてかすかに薄日が差しはじめたのである。

このところ天候不順とは言いながら、あたかも木下川堤を想起させる一瞬の異変には累と権之丞の二人は、さすがに顔みあわせるひと幕があつた。

編集後記

○…この機会に本伝と書替を整頓して見て頂こうと努力した。芝居では大きな伝承である累物の全体と部分が見えていれば幸いである。

○：別記のように祐天寺さんへお参りした。

大木は蒼古として茂り染まりそうな蟬しぐれに身が洗われる思いであった。十二年前、身売りの累を上演して、同じお一人と参拝した。読経も不易なら葉月会も変わらない。しみじみと幸せをかみしめた。

(成島)

〒102 発行 平成9年8月20日
千代田区隼町4-1 国立劇場
社団法人 伝統歌舞伎保存会
葉月会
編集部 成島和男
印刷所 ハイビジネス
☎ (3265) 7411番